

臨床心理学における子どもの描画に関して

ー相互交流としてのスキュグルを中心にー

大場 有希子

1. はじめに

子どもにとって絵を描くとはごく自然な行為の1つであり、子どもの心理療法であるプレイセラピーの中で自発的に子どもから絵を描き始めることも少なくはない。臨床心理学において描画はさまざまな心理アセスメントとして用いられることが多いものの、子どもの描画は認知発達の観点から論じられることが多い。そこで本論では、子ども、主として描くということが可能になる幼児期からある程度写実的な絵を描くようになる児童期頃までの描画について、絵を描くことを遊びや表現として臨床心理学的な観点から捉えたい。そして描画の発達的变化を他の心理発達と関連付けた文献や、描画のコミュニケーションとしての側面を重視している先行研究を基として、そこで生じていることやその発達的な変化の意味について検討し、心理臨床における子どもの描画の意義や子どもの表現に関する理解に繋げることを目的とする。

2. 描画能力の発達

描画能力は発達とともに変化するものであり、まず幼児期から児童期に渡る子ども達の描画の発達の側面について検討したい。描画は一般的になぐりがきから始まり、形が生じ、視覚的に「何の絵か」がわかる表現や写実的な表現へと変化していくとされる。この変化についてはさまざまな論があるが、本論では描画の発達を情緒や社会性、知覚などの諸発達と絡めて論じた Lowenfeld (1947/1995) の描画の発達段階を軸として緒論について概観する。

子どものはじめの描画はなぐりがきといわれる錯画である。Lowenfeld (1947/1995) の“なぐりがきの段階”は2～4歳頃であり、最初のなぐりがきは運動感覚との繋がりが大きい。なぐりがきで描かれた結果は子ども達たちにとってあまり重要ではなく何かを表すという表象性はないものの、運動により紙にしるしができることに喜びが見出される (Cox, 1992/1999)。これはどのように腕を動かせばどのような描線が生じるかという協応運動へと発展してさまざまな形のなぐりがきが生じるが、なぐりがきの種類を分類した Kellogg (1969/1971) は、幼児はなぐりがきの中でさまざまな図式を獲得し、描いた描線を1つの画面の中に配置し、描いたものを関係づける力を身に付けていくとした。さらに、獲得した基本的な図式を組み合わせで多様な表現が可能になっていくと考えた。そして、描く行為そのものの中で運動と結果として生じる視覚、全体の形と細部、刺激と反応等を自分自身の中で統合していく (Kellogg, 1969/1971)。2～3歳頃の子供達は描いたものに意味を与えるようになり、身体運動の探索的な活動であっ

た描画は、何かを表象するための手段となっていく。稚拙な描画能力ゆえに言葉による補足がなければ客観的には何を表しているのかわかりにくいものも多いが、このような命名行為には語彙の獲得や描いた絵と表される対象が分化しはじめていることなどが関わっており、絵と言葉の関係はより深いものとなる(磯部, 2006)。3歳頃には、「丸」という閉じた形の出現によって内外の境界が生じ、閉じた形の内部は外側と区別されたものとなり、描かれた丸やその内部と背景となる紙に図と地の関係を発見する(辻, 2003)。このころの子どもの発達過程としても、模倣が可能になるなど自分と他者の区別が明確になり始める時期である。

描画への命名や形が生じてくるとともに、子ども達は描く対象の視覚的な要素に着目するようになり、意図的に描く対象と絵について視覚的・外見的な類似性を作り出す(Cox, 1992/1999)。4〜7歳頃までを Lowenfeld (1947/1995) は“様式化前の段階”と呼び、意図的に形態を描こうとするが物の見方がまだ定まらないため描画の様式がはっきりせず、今日と明日では違う方法で同じものを表すことも多い。そして、行動範囲や経験の広がりとともに、描画表現はより豊かなものになる(辻, 2003)。丸の内側を密なものにするとともに、閉じた形の外側の世界も描かれるようになり、様々な形も描けるようになると、それらをもとにして内側と外側に接続するように模様や形を組み合わせ、さまざまなものを表現するようになる。さらに、1つの画面の中にさまざまなものを羅列的に表すような描き方から、少しずつ描いたもの同士の関係性が描画に表されるようになる(磯部, 2006)。Lowenfeld (1947/1995) は7〜9歳頃までを“様式化の段階”とし、形態概念が安定するとともに、画面の中の描く対象同士を少しずつ関係づけるようになるとしている。また、このころまでに地面線となる基底線が出現し、あらゆるものを1本の線の上に描くようになる(Lowenfeld, 1947/1995)。基底線は画面の空間に区切りを生み、その上に描かれたものの位置関係や高さ、大きさの比較の基準となるものである。基底線が出現する時期の子ども達は語彙が増え、順序立てて事物との関係を捉えようとする時期であり、基底線の上に立つ人の絵のように、自分自身が地上に立っていて、そこには自分以外の他の人や物も立っているという感覚がはっきりしてくる時期と考えられている(磯部, 2006)。発達とともに基底線は徐々に消失し、地平線が描かれるようになると、空間が区切られた絵というよりも空と地のつながった絵が描かれるようになる。子どもたちの空間認識はより広がり、より写実的な絵を描こうと努力するようになる。Lowenfeld (1947/1995) は9〜11歳頃までを“写実化の段階”とし、社会的独立が意識されはじめる時期に、それまでの記号的、図式的な絵からより実物に近いようなものを描こうとするようになる。

このような描画の発達に関しては、ここまで述べてきた運動や言語発達、社会性の発達などさまざまなものが絡まりあっているとされ、異なる時間帯の表現が1つの画面内になされたり、関心の大きいものをより大きく描いたりなど、子ども独特の表現も多々見られる。

3. 心理臨床における描画とその発達

それでは心理療法の中で扱われる描画やその発達については、どのようなことが考えられるであろうか。もちろん学派によって描画の捉え方は異なり、例えば Freud 派であれば絵は自由連想として扱われ、Jung 派は描画を夢と同じようなイメージとして扱い象徴について考えることもあるだろう。また、対象関係論的な立場の分析家であれば、描画からクライエントーセラ

ピスト関係を解釈することもあると思われる。このように学派による扱いは異なるものの、高橋（1993）は一般的に心理療法としての描画の意義について、表現行為自体の治癒力やカタルシス効果、言葉以前の心的内容が表れること、多義性や多くの対象の同時的表現、治療関係の強化等をあげている。また、心の理解につなげようとして描画を用いる際には、絵の発達的变化と、絵に含まれ象徴されるさまざまな他者の影響を配慮しなければならない（高橋，1993）。以上より心理臨床場面における描画とは、絵を描くこと自体が治療的な作用を持つといえ、そこには描き手の無意識や、クライアントとセラピストの関係性などさまざまなものが表され、それを共に見つめることで洞察が深まる可能性が示唆されている。この意味で、治療としてもアセスメントとしても描画が用いられることは多いであろう。

子どもにとっての描画は、心理療法の場面でなくとも自然発生的なものであり、感じたものを表すこと、描く運動を通して身体を感じることから生じる。そして、子どもの描画は自分自身の内側及び、外で見ている人間とのコミュニケーションでもある（磯部，2006）。先述の心理療法としての描画の要素はもちろん子どもの心理療法における描画についても言え、言語が未発達である幼い子どもや緘黙児などにとっては特に言葉以外での心の表現をしてそれをセラピストと共有する媒体となり得るという点でも、子どもの描画はとりわけ重要な位置を占めると考えられる（Wallon, 2001/2002）。ここで、心理臨床において扱われることが多い描画法であるバウムテストや風景構成法（以下 LMT とする）の発達的な研究についてみていきたい。

バウムテストは幼児期頃から可能とされており、形が生じる頃と対応している。創始者である Koch（1957/2010）は、早期型として発達初期のバウム画に生じる指標を挙げている。また Stora（1964）は発達段階や性別ごとに生じやすいサインについて、親との関係や自我、自律性などの心的状態や情緒と絡めて論じている。Koch（1957/2010）の早期型指標を基にした研究はわが国でも多くなされている（国吉ら，1962；青木，1986 等）。幼児期初期には細部が分化せず矩型で実や葉を含んだ木全体の表現として葉や枝のない木が描かれ、そこから徐々に要素が増え、縦横のみでなく斜めの線が使われ、枝や幹が一本線から二本線となり、幹と冠部の分化、枝分かれもして全体が大きくなる（青木，1986）。また全体像から見た研究もなされ（藤岡・吉川，1971；中島，2007 等）、中島（2007；2011）の幼児期から児童期のバウム画の分類によると、幹と樹冠がある木として認識できる絵は 3～4 歳頃にかけて描画可能となる。木の全体像として矩型の幹のみを描くのはやはり初期に多く、児童期に樹幹がなく幹を閉じる線が最上部となる幼児期に多い絵は減り、7～8 歳頃に人の手のように左右に枝が伸びる木が多くなる。樹冠はあるがその下に枝がなく幹が解放された絵が幼児期・児童期を通して最も多く、これらの解釈については今後検討が必要とされているが（中島，2011）、より分化され立派で豊かな木へと変化していく過程は抑うつ治療過程などにも見られ（山中，1973）、自分の在り方やその軸、外界との関わり方などが解釈として見受けられる。バウムテストの発達的变化については、単なる発達段階や各年齢における標準を知るだけでなく、子どもにのみ生じる指標が含まれた描画の場合、その指標が生じ得る年代の健常児、精神遅滞、より年長のものの退行という多岐にわたる可能性を考えることが必要とされている（Koch，1957/2010；山中・岸本，2011）。特に退行とは、過去のその時期の課題を乗り越えられておらず、取り組むことが必要なものとして考えることができる（山中・岸本，2011）。Koch（1957/2010）は、大

人の早期型はその人の生の一部が無意識で原初的な状態のまま発達せずに経過してきたと受け取ることができるとした。心理臨床の描画の発達指標は発達段階を見るだけでなく、心理的なテーマがどのようなものか、どの発達段階に関連するものかを考えるヒントにもなりうる。

LMT の発達研究としては、弘田（1986）、皆藤（1994）など様々な研究があるが、ここでは高石（1996）の構成型の分類による発達研究を挙げる。LMT は 1 つずつの要素を順に描きながら構成していくことが必要であり小学生頃から可能とされているが、実際の風景画に比べると 1～2 年遅れた絵の印象を抱かせることが多い（高石、1996）。高石（1996）による小学生の横断研究では、風景を構成する要素間の繋がりが無い絵から、一部の要素間に繋がりが生じ、全て正面から見た図として視点を統一して平面的な表現で要素が統合された風景へと移行する。その後、真上からの視点を基にした絵を描こうとするようになるが、不完全である状態から徐々に視覚的リアリズムにのっとった 1 つの視点から全体的に統合された景色が描かれるようになる。このような変化を、高石（1996）は自我発達と関連して述べており、風景やその要素といった対象を見ることは自分の視点についての情報が含まれ、自分の見えているものを知らずして自分がどこにいるかはわからない。LMT の発達過程においては、運動や感覚などの直接的体験によって対象を把握する自我と対象の距離がない状態から、各要素を 1 つずつ見る近距離、視点を固定できないが部分的にいくつかをまとめて見る視点、自我が対象から大きく距離を取って全体を 1 つとして見る固定された視点を持つ段階へと変化が見られ、これは、自分の定点を作り、さまざまな角度から自分を見る視点を作っていく過程として考えられている（高石、1996）。また 10 歳頃に画面の上下を川が垂直に貫く表現が特徴的であり（山中、1984a；高石、1996；柳沢ら、2001 等）、真上からの視点が入ってくるこの時期は、自我と対象を大きく遠ざけることで自分を捉えようと試みる時期である。そこから徐々に適度な距離をとれるようになると同時に描画に風景を収めていくようになると考えられている（高石、1996）。このような LMT の発達の变化からは、「私」の視点、ひいては「私」の感覚のあり方の変化や発達も描画に表れている。

その他の実証的な研究では、山形（1999）は描画発達について認知発達の段階に沿いながらも対人関係の視点から考察を進め、発達初期における表象的描画は他者との関係の中で成立すると実証的に述べている。また、松瀬・若林（2001）は、自閉症児の描画は健常児と同様の経過を辿るが、その遅れや質的な偏りがみられ、言語発達とも関連があると示している。描画の特徴としては、細密な描写、特異な興味・関心に関連した描画、文字や記号の使用などがみられ、人物画の描出は遅いという。さらに、中植（2007）は、橋本（1995）の遊びの発達理論や Kagin & Lusebrink（1978）の表現療法の連続体理論（ETC 理論）¹を用いてスキュグル表現の感覚運動的な要素の強い段階から象徴性を持った段階へと発達指標を作成し、事例検討を通して治療経過とともに描画の変化を指標で示し、その臨床的有用性を示唆している。

これらからは、描画の発達の变化は臨床的なアセスメントや見立ての際にも有効であり、単

¹ 描画のなぐりがきから創造性までの表現の概念的モデル。抽象性の発達過程として、運動・感覚段階（感覚的活動に没頭することで意識的な統制から解放される）、知覚・感情段階（アート素材との相互作用を通じて知覚や感情を扱う）、認知・象徴段階（抽象的な思考によりイメージの概念的操作がされる）があり、それらの統合的な段階として創造性段階が位置する。

なる認知発達だけでなく、自分を作っていく過程にある子どもの自我の発達、「私」「自分」という感覚の在り方が表れており、治療経過を捉える一助にもなると考えられる。ただし繰り返しになるが、臨床場面では発達的な特徴は必ずしもその年齢であれば達成されているわけではないと捉えられることも多いであろう。例えば、小学生のクライアントがなぐりがきの絵を描いたからといって、一概にその発達水準が幼児期のものであるとは言えない。心理療法の中で退行的な描画を描く場合も十分あり得るし、描画の力があっても内的な混乱状態にいる子どもはただ紙を塗りつぶすことでしかその混乱を表現できず、生活年齢以前の発達水準といわれる描画の方がクライアントの表現したいものがより表しやすいという可能性や、そのクライアントにとって乗り越えることが必要なテーマが表れた退行的な表現である可能性も考えられる。また、特に子どもにおいては客観的には奇妙に見える描画は必ずしも認知能力や描画能力の不足によるものではなく、より心理的な要因や子どもの内的な世界観によるものかもしれないため、発達水準を捉えるとともになぜそのような絵が生じているのか考えることが重要である。

4. 遊びとしての子どもの描画

前項で描画の発達的な側面の臨床的有用性ととも、描画は子どもにとってはとりわけ他者に対する心の表現やコミュニケーションとしての側面が大きいと述べた。ここで着目したいのは、心理療法の中の描画は二者の「間」での行為であるということである。寺沢（2006）は絵のクライアントとセラピストの橋渡し機能について言及しており、描画という二者の間の媒介物である「橋」によって橋の両側の「端」であるクライアントがセラピストと繋がる感覚を持てる可能性に加え、橋は逆説的に「端」を分けるものでもあるため、描画の存在は二者を繋ぐと同時に両者を分けるものでもあるとしている。つまり、クライアントとセラピストは互いに繋がるができるが、同時に互いに区別され得る他者であることが描画という「橋」によって強調されるのである。そしてその橋としての描画は両端である二者がいるからこそ作られるものであり、ある意味で二者の協働産物と言えるのではないだろうか。高橋（1993）は描画には二者関係が表れるとしていたが、描画行為そのものに描き手と見守り手の両方の要素が含まれた間主観的なものとなるといえよう。

これらのことから、描画は Winnicott（1971/2015）のいう内的世界と外的現実のどちらにも所属を問われない中間領域的なものといえるであろう。描画はセラピストとクライアントの両方が関与するためどちらにも属するものでもない「間」のものであり、描き手にとっては自分の内的な世界の表現であると同時に外側の現実世界に存在する物でもある。また、大人にとって描画は芸術活動という印象を持つものである一方で、子どもにとってはごく自然な遊びの1つである。子どもの遊びはまさにこの中間領域で繰り広げられるものであり²、その中で子どもは自己を発見することや、外的な対象や現象を自らの内的世界を表現するために使うことができる（Winnicott, 1971/2015）。遊びが生じ得る中間領域は子どもが母親と自分との間に作り出す空間から広がるものであり、子どもが母親と一体化されて万能感に満ちた感覚から母親は別個

² Winnicott（1971/2015）は、中間領域での遊ぶことについて“内なる心的現実ではない。それは個人の外側にあり、しかし外的世界ではない”としている。

の個人となっていく脱錯覚の過程に生じる二者の「間」の空間としての機能を持つ。つまり、子どもたちにとって自然な活動である遊びは、外界にいる他者と関わり合いながら、内界を持つ自分を作り上げていく場であり、外界との境界を持つ1人の個人としての自分を作り上げていく場と考えられる。これまで述べてきた描画のあり方を考えると、子どもにとって絵を描くこともまたこのような遊びの1つになり得ると思われる。描画は内的世界と外的世界の間に生じるものであり、臨床場面であればクライアントである子どもとセラピストの間のものである。子どもの描画行動の中では、アイコンタクトを取るような二者間の関係性と、二者がともに描画を見つめるような三項関係を移ろいながら2人の関わりが広がっていく（白川，2001）。それによりイメージや感じたことを共有するやりとりや繋がっている感覚が生じるが、それだけではなく、中間領域としての描く行為そのものの中にセラピストとクライアントの交流があるともいえるだろう。子ども達の描画行為は写実性や計画性を持った完成形を目指すものというよりも、描いているその瞬間に画面の上に世界を生み出しているという感覚も大きいのではないかと考えられる。そして、その瞬間には共に在る他者の存在も関与している。

5. スクィグル技法

描画行為の中での相互的な交流があるとすれば、どのようなことが起こっているのであろうか。このことについて、描画の中でも Winnicott が考案したスクィグルを手掛かりとして考えたい。スクィグルはセラピストとクライアントの一方がなぐりがき（サーブ）、もう一方がそこから絵を完成させる（レシーブ）という描画法であり、役割を変えて交互に描く。このような方法から、スクィグルはとりわけ相互性が高く描き終えた描画に両者の関わり合いを具体的に見ることができると考え、この素材を手掛かりに検討することとする。Winnicott

（1971/1987）はスクィグルを子どもの治療においてコミュニケーションや遊びとして用いており、場合によっては子どもが自分のなぐりがきを用いて絵を描いたり、自由画を挟んだりなど自由度が高い。多くの事例で子どもたちの心理的なテーマがスクィグルに表れており、そこから空想が広がっていく様子が見受けられる。また、自発的な場合もセラピストが尋ねる場合もあるものの、スクィグルから夢の話や絵に繋がるが多く、結果的にそれが子どもの治療にとって有意義なものとなっている（Winnicott, 1971/1987）。スクィグルは二者の間で遊びながら、より深い次元でのコミュニケーションに達するものと考えられる。

スクィグルを日本に紹介した中井（1977）によると、スクィグルは“患者からみてワンウェイ・ミラーでない、治療者患者双方にとって半透明な柔らかな交通の場の印象”が大きく、役割を交換する相互法によって転移・逆転移や関わり合いが描画の前面に出る。スクィグルは日本の子どもの事例論文に登場することも多く（松本，1999）、発見の遊び（白川，2001）とも言われる。一方が描いたなぐり描きから何かを見つけ出すという中で、外側から投げかけられた描線に内側から生じるイメージを投影し、さらにそのイメージと描線を重ね合わせて1つの絵となるように自ら描画・彩色を行う。一方から投げられる描線と、もう一方が投影するものの両者を重ね合わせて絵として再構成し、それを描いている間はもう一方に見守られたり何かお喋りをしたりし、描き終えた後は共同注視が行われる。この中では複雑に両者の主観が織り交ざって組み込まれていると思われる、二者のどちら側から見ても自分の内的世界と他者や描く

対象といった外的世界が混在している体験であると考えられる。また、交互に役割を交代して繰り返していくという点でも、二者が互いに影響し合いながら続いていくものであるといえる。スキュグルは二者の“波長合わせ”を可視化する場とされ（中井，1982），両者の交流が絵やその描画過程という見える形で表されているともいえよう。

松本（1997）は芸術家の Klee の言葉（千足，1995）を借りてスキュグルを“関係の中で投げかけられた描線に、見えるもの（内的現実）に見えるもの（外的現実）で再現し、それを共有することで見えるようにする方法”としている。白川（2001）によると、子どもは外的な世界に対して理解が及ばないことに不安を覚え、絵を描きながら自分の周りの世界を意味づけ、整理する、つまり見えにくい世界を自分なりに見えやすくすることで不安に脅かされることも少なくなるという。言い換えると、外の世界の見えにくいものや、内から生起する自分にだけ見えるものを、描線やそこに描き加えるものを使って自分の内とも外とも区別ができない紙の上に表し、それを他者と共有することで他者にとっても見えるものとなる移行過程が含まれている。実証的な観点からも、スキュグルにおける描画は二者の相互作用によって変化することに加え、描画やそこから生じる物語は二者の関係性の産物であり、それによって関係性が展開していくという二重性が示されている（里見，2011）。スキュグルは先が見えない故の楽しさと怖さを含む遊びである。基本的なルールはあるがそれに従うだけでなく子どもと一緒にルールを決めていくことができる柔軟性を持っており、相談しながら構造を共有していく過程が場を作ることに繋がり、その構造は二者のその後の関係性を作っていく（山崎，2005）。つまり、スキュグルというゲームそのものが二者の相互的な作用によって形作られていくものであるといえ、その意味でもスキュグルは中間領域における遊びということができよう。

6. 絵を描くことと言葉にすること

スキュグルは絵を描くことで言葉にできないものを表すとされるが、言語との関連も示唆されており、山中（1984）の MSSM や田中（1992）の物語作りなどスキュグルから言葉でイメージをまとめるような変法も提示されている。松本（1997）は話すことに苦手がある男児との事例でスキュグルを用い、セラピストの描画の模倣が多い時期から、描線や色彩が豊かになり、最終的に対人交流場面が増加したという描画の経過を、模倣の段階、感覚・運動・情動的段階、主体的創造性・対人交流の段階として発達的变化と関連付けて解釈している。そしてこれらの変化を描画の中で共有しながら、絵の中に描かれるようになったような対人交流へと開かれる萌芽が生まれたことが報告されている。スキュグルの描き合う体験は幼い頃の母子関係にあるような前言語的な体験の共有になり得、言葉の共有に繋がる基盤となるものだとされている（松本，1997）。中植（2007）もまた、スキュグル描画が描線や自分の絵に意味を与えないような運動感覚的なものから、描線と彩色のゲシュタルトを一致させて描き、その絵に関する物語が語られるようなより創造的なものへと移行し、言葉で他者に伝えることが可能になり始めた子どもの事例を報告している³。白川（2001）の紹介する事例でも、言葉の遅れがあった幼児がスク

³ この事例の中では、生じたスキュグルの描画に関して ETC 理論やの遊びの発達理論による指標との対応が検討されており、感覚運動的な段階の表現から情緒的、さらには象徴的な段階へと変化していく様子が実証的に示されている。

ィグルという視覚的な材料を使いながら言葉をより自由に扱えるようになる経過や、社会的な認知や状況判断が難しく、言語交流が難しい小学生とのスキィグルの中で、少しずつ言葉を発して単語とイメージを結び付ける力が発揮され出した経過などが報告され、絵を通して言葉のやりとりが活発になっていく様子がいくつもの事例で見受けられる。その中にはより原初的な運動や感覚を楽しむような描画から、より象徴的で独自の創造性を含んだものへと変化を辿るものが多く見られ、児童や中学生であっても、臨床場面ではスキィグルの中で幼少期の描画の一般的な発達過程と同様の経過を辿り、より高次の象徴性を持つ言葉の発達や使用と繋がりを持ち、言葉の変化と絵の変化は複雑に絡まり合いながら経過を辿ると考えられる。

これらから、スキィグルでは言葉になり得ないものや言語的表現が未熟な子どもが言葉で表現し難いものを描画という非言語的な媒体で共有することができ、その媒体を通して逆説的に言葉での表現や言語発達が促される可能性が示唆されている。ただし、このようなことはスキィグルに限ったことではないのかもしれない。Naumburg (1966/1955) は“患者が内的体験を絵にして表していくにつれて、言語表現もまた明確に、またきめ細くなるという場合が少なくない”と述べている。寺沢 (2006) もまた描画の言語と非言語の橋渡し機能を提唱し、絵は個人の内界にある言葉になり得ないものの表現でもあり、絵を描くという行為でそれを可視化・外在化することでセラピストとともにそれを見つめ、語り合う中で言葉になり得なかったものの言語化が促進されるという。絵の中のイメージからは言葉が生み出され、それを子どもが話すことで絵と言葉が結びつき、それによりさらなる想像力や創造性が発揮され、新たなイメージが生み出される (白川, 2001)。子どもたちは、絵を描き、それを言語化することで現実や心的世界を再構成しようとしているのではないだろうか。描画と言語には、言葉にならないものを表す描画が言葉を促すという逆説的な関係性が見受けられ、絵に浮かび上がるイメージと言葉の間には、相補的で相互作用的な関係性があるのではないかと考えられる。

7. 描画における相互交流

(1) スキィグルにおいて

白川 (2001) の事例ではコミュニケーションが難しい男児は、スキィグルでも反応が遅くぼんやり空を見上げながら「空」とつぶやき描線を見捨てて塗りつぶすような描画から少しずつ変化していき、セラピストの存在を感じ言葉での意思表示ややりとりが出てきたころには、ただ塗りつぶすだけではなく描線を見たらうでそれを使った反応が生じ始めている。また、前述の言語発達の視点を中心にスキィグルの経過を述べた松本 (1997) の事例からは、二者の交流の質が変化していることがスキィグルの様子に表れている。初期にはクライアントがセラピストの描画を模倣することが頻発していた。模倣とは、他者の存在を認め、ある対象を他者と共有する方法であり、自閉的な世界からセラピストとの関係性を作り始める時期にこのような描画が頻発したという。その後は、クライアントのなぐりがき描線が爆発的に増加し、描線という相手に対する“問いかけ”が豊かになっていると考察されている。さらに色彩数も増え、二者の間では運動や感覚を楽しむ交流が持たれていたようである。また、その後は描画内容に自己イメージや、動的な要素が含まれるようになる。この頃セラピストは、クライアントの反応に寄り添うような描線や描画を描いておりクライアントの主体性やエネルギーが際立つとも

に、クライアントは一緒にいて1人というような感覚の中で描いていたのかもしれない。最終的には日常的な内容の絵が増え、クライアントはセラピストの言葉に呼応したような絵を描き、自ら語ることも生じる（松本，1997）。このように関係性の変化によりスキュグルで描き合うものが少しずつ変わり、スキュグルの中で二者の交流が持たれていたと考えられる。

Winnicott（1971/1987）はスキュグルの中で“好球”を打ったという事例でも“もし球が正しい位置に来なかったら私は打てないというのが、実にこの作業の特徴なのである”と述べており、その相互性が強調されている。スキュグルではセラピストが完成させた描画を見て子どもの方から何かを描き加えてイメージを広げていくこともあり⁴、お互いが自分と相手のイメージを使いながら、それを画面の上で展開させていくというまさに二者の「間」で起こっている。さらに、白川（2001）の紹介する事例の中で、小学生女兒は自らなぐり描きをした線を自分でライオンに変えてセラピストに獲物を描くことを提案し、セラピストが獲物を描き入れることで画面が完成する。さらに、幼児期男児はセラピストの描線に山を投影して描き終えたところから連想が膨らみ生物を描き加え、セラピストに対してもさかんにお喋りしながら絵が膨らんでいく（白川，2001）。このような事例からは、描画の中、描くことの中では、絵で、言葉で、それ以外の非言語的な水準で二者がやりとりをしながら絵を作り上げていく様子が鮮明に浮かび上がってくる。スキュグル自体が二者の交流の場になっているのである。

スキュグルは臨床事例の結果としての治療効果やスキュグルの体験そのものの意味が重視されることが多いが、いくつもの事例研究で共通して描画そのものを見ていくことで二者の交流のありようを考えることができる。現時点では事例の中で描画の経過を追いながら、関係性の視点からそこで生じたやりとりに着目することが多いように思われる。しかし、心理臨床における描画の発達的变化からは形成過程における「自分」の在り方が見られる可能性が考えられ、上記の事例においてもセラピストに対する自分として、もしくは他者を意識せずぼんやりとした存在としての自分の在り方がスキュグルに表れているのではないかとと思われる。他者からの投げかけである描線にどう関わるか、逆に他者にどのように投げかけるか、描画過程でどのような交流や遊びが行われているか考えることは、関係性や交流の様相だけでなく、特に子どもの場合は他者や外的な世界との距離や関わり方、その関わりを持つ「自分」という感覚をどのように作っていつているのか考えることにも繋がるのではないかとと思われる。また、「自分」と「他者」の感覚は同時生成的なものとされており（河合，2010）、スキュグルによる描画はその中間領域の特徴から「他者」や「自分でないもの」の感覚や捉え方、自分と他者の「間」の空間がどのようなものかについても考えることができるのではないかとと思われる。もちろん、それらは単なる発達段階として捉えられるだけでなく、他の描画同様に治療的に退行している可能性や、その水準に課題や心理的なテーマが表れる可能性も考えられる。そのため、スキュグルに関しても発達的な視点での研究を積み重ねていくことが必要と考えられる。

（2）自由画

さて、スキュグルに限らず、子どもは自発的に絵を描き出し、それがコミュニケーションと

⁴セラピストが描いた花丸にクライアントが葉をつけて向日葵にする、セラピストが描いたハートのペンダントを見てハートをつけたウサギを加える、セラピストが描いた蝶と花を見て触角を花に伸ばして周囲に植物も加える等、複数の事例でこのようなことが頻発している。

なることもあるだろう。心理療法の中で子どもが自発的に絵を描くことは往々にして生じ得る。このような描画はスキュグルのように描線という可視化された他者の要素が無く、相互法に比べると関係性が前景に表れることは少ないのかもしれないが、描く過程を見守り、ともに描画を見つめる他者の存在がある点で、描画や描画を通した関わりは間主観的なものとなり得る。

山上（1997）の自閉症男児の事例では、ぼんやりとした世界から徐々に母親を母親として認識し、模倣が生じ始めた4歳頃に描画が爆発的に増加し、中心イメージを持つ円環の図形を描き続けることが特徴であった。山上（1997）はこのような描画が生じるのは自己意識が鮮明になる時期であると指摘し、男児もこの時期に生活の中で模倣や意思表示などが生じ、自分と他者が分化しはじめている。自分と他者が生じ始める時期に描画が爆発的に増えるという点は興味深く、クライアントは没頭して絵を描いているがセラピストに見守られていることも意識されていたという（山上、1997）。ただ没頭して描いているだけでなく、描きながら、描き終えた絵を共に見つめながら、二者の関わり合いが生じており、自他分離の生じ始めた頃に描画が頻発するようになってきていることも含めると、やはり他者がいるからこそ生じた描画でもあると考えられる。またこの事例では、その後電車や食べ物、植物などの対象が描かれ、クライアントの関心が内的なイメージから外的な対象へと移行していることが示されるとともに、単語や自分の名前を理解し、ほめられて喜ぶなど相互的なやりとりが生じるようになる（山上、1997）。描画においても日常においても自分の外側へと関心が向けられ、指差した先の対象を他者に言語化してほしがるなどの様子が見られ、描かれた対象物は単なる外的世界の模倣や再現というだけでなく、まるでセラピストとともに外的な世界を探検しているかのようなようである。またこの男児は言語を発することは難しいようであったが、言葉の理解という面では言語発達は見受けられた（山上、1997）。自他の分化とともに少しずつ絵も変化し、他者との交流自体が難しい事例であるため、他者と関係を持つ力の発達が描画に表れているともいえるが、絵を描くことを通してともにそれを見つめ、絵や描くことを媒介として相互的な交流をすることが少しずつなされるようになっていっていると考えられるのではないだろうか。

子どもの描画はコミュニケーションそのものでもある。内的世界を表現するだけではなく、自分の無意識との対話、相手との対話であり、両者の間からその表現が生まれていると考えられる。また、描画は遊びとなり得、そこから発達の側面、心理的要素、他者との関係のあり方などさまざまなことが浮かび上がる。子どもの描画については「内的世界を他者に伝える」という視点でコミュニケーションとされることが多いが、特に心理臨床場面では単に伝えるだけではなく、そこに相互的な交流があると考えられている。つまり、単なる投映ではなく、言葉を促すものでもあり、他者に伝えるものであると同時に、自分に伝えるものでもあると考えられ、描画行為自体に他者との交流、自分の無意識との交流があると考えることができる。それらが可視化される場として、描画から「自分」の在り方、自分に相対する「他者」の感覚、そしてその間の交流の質を考えることに繋がるのではないかと思われる。

8. おわりに

本論では、描画の発達過程及び、スキュグルを中心とした臨床場面での子どもの描画とその変化について、描画を遊びとして捉え、言葉との橋渡しやセラピストとクライアントの交流と

なり得るという視点から検討した。しかし、スキグルは相互性の高い技法であり、子どもの描画全体に一般化できるかということについては疑問が残るため、その他の描画法を考慮した上でさらなる考察が必要と考えられる。また、心理療法には遊ぶことができないクライアントもやってくる。その場合、描画を遊びとしてその中で交流するということは難しいと考えられるため、そのような子どもたちがまず遊べるようになるためにどのようにしていけばよいのか、遊べるようになる過程とはどのようなものかということを踏まえて、より考えを深めていくことは今後の課題であると思われる。また、描画内容自体に着目して子どもの描画の特徴やその内容が表していることなどについて数量的・事例的に検討していくことも必要と考えられる。

文献

- 青木健次 (1986). バウムテスト. 臨床描画研究, **1**, 68-86.
- Cox, M. V. (1992). *Children's drawings*. London: Penguin Books. (コックス, M. V. 子安増生 (訳) (1999). 子どもの絵と心の発達. 有斐閣.)
- 藤岡喜愛・吉川公雄 (1971). 人類学的にみたバウムによるイメージ表現. 季刊人類学, **2**, 3-28.
- 橋本雅雄 (1995). ウィニコットの早期精神発達理論について. 牛島定信・北山修 (編). ウィニコットの遊びとその概念. 岩崎出版社.
- 弘田洋二 (1986). 風景構成法の基礎的研究 発達のな様相を中心に. 心理臨床学研究, **3**, 58-70.
- 磯部錦司 (2006). 子どもが絵を描くとき. 一藝社.
- Kagin, S.L. & Lusebrink, V.B. (1978). The expressive therapies continuum. *Art Psychotherapy*, **5**, 171-179.
- 皆藤章 (1994). 風景構成法—その基礎と実践. 誠信書房..
- 河合俊雄 (編) (2010). 発達障害への心理療法的アプローチ概念の心理療法. 創元社.
- Kellog, R. (1969). *Analyzing Children's Art*. Palo alto, Calif: National Press Books. (ケログ, R. 深田尚彦 (訳) (1971). 児童画の発達過程. 黎明書房.)
- Koch, C. (1957). *Der Baumtest: der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel*. 3. Auflage. Bern: Verlag Hans Huber. (コッホ, C. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 (訳) (2010). バウムテスト [第3版] —心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究. 誠信書房.)
- 国吉政一・小池清廉・津田舜甫・篠原大典 (1962). バウムテスト(Koch)の研究(1)—発達段階における児童(正常児と精薄児)の樹木画の変遷. 児童精神医学とその近接領域, **3**, 237-246.
- Lowernfeld, V. (1947). *Creative and mental growth*. London: Penguin Books. (ローウェンフェルド, V. 竹内清・堀ノ内敏・武井勝雄 (訳) (1995). 美術による人間形成. 黎明書房.)
- 松本真理子 (1997). スキグルの治療的意義に関する一考察 言語発達の視点を中心に. 心理臨床学研究, **15**, 501-512.
- 松本真理子 (1999). 子どもの描画療法における歴史と将来の展望 日米の文献的考察を踏まえて. 心理臨床学研究, **17**, 198-208.
- 松瀬留美子・若林慎一郎 (2001). 自閉症児の描画表現に関する発達的研究—言語発達と描画発達との関連について—. 小児の先進と神経, **41**, 271-279.
- 中井久夫 (1977). ウィニコットの Squiggle. 芸術療法, **8**, 129-130.
- 中井久夫 (1982). 相互限界吟味法を加味したスキググル法. 芸術療法, **13**, 17-21.

- 中植満美子 (2007). スクィグル法による子どもの描画表現に見られる発達の特徴とその変化に関する研究. 心理臨床学研究, **25**, 37-48.
- 中島ナオミ (2007). バウムテストにおける樹型の分類. 関西福祉科学大学紀要, **11**, 123-137.
- 中島ナオミ (2010). バウムの発達. 臨床心理学, **10**, 668-673.
- Naumburg, M. (1955). *Dynamically oriented therapy; Its principles and practice*. New York: Grune & Stratton. (ナウムブルグ, M. 中井久夫(監訳) (1966). 力動指向的芸術療法. 金剛出版)
- 里見聡 (2011). 心理臨床面接がもつ間主観性に関する一考察 スクィグル・ゲーム, MSSM 法を通して. 心理臨床学研究, **29**, 97-108.
- 千足伸行 (1995). パウル・クレー 人と芸術. 中日新聞社社会事業部 (編). パウル・クレー展カタログ. 中日新聞社.
- 白川佳代子 (2001). 子どものスクィグル. 誠信書房.
- Stora, R. (1964). La personnalite a travers le test de L'arbre. *Bulletin de psychologie*, **17**, 1-181.
- 高橋依子 (1993). 絵と“こころ”. 中谷洋平・藤本浩一 (編著). 美と造形の心理学. 北大路書房.
- 高石恭子 (1996). 風景構成法における構成型の検討—自我発達との関連から. 山中康裕 (編). 風景構成法 その後の発展. 岩崎学術出版社.
- 田中勝博 (1992). なぐりがきと〈ものがたり〉. 臨床描画研究, **7**, 147-165.
- 寺沢英理子 (2006). 絵画療法の橋渡し機能. 心理臨床学研究, **24**, 153-165.
- 辻政博 (2003). 子どもの絵の発達過程 全心身的活動から視覚的統合へ. 日本文教出版.
- 山上雅子 (1997). 物語を生きる子どもたち 自閉症児の心理療法. 創元社.
- 山形恭子 (1999). 発達初期における表象的描画の成立過程. 臨床描画研究, **12**, 6-19.
- 山中康裕 (1984a). 「風景構成法」事始め. 中井久夫著作集別巻 風景構成法 岩崎学術出版社.
- 山中康裕 (1984b). 箱庭療法と絵画療法. 佐治守夫・福島章・越智浩二郎 (編). ノイローゼ(第2版). 有斐閣.
- 山中康裕・岸本寛史 (2011). コッホの『バウムテスト [第三版]』を読む. 創元社.
- 山崎玲奈 (2005). スクィグルゲームと遊び. 東山紘久・伊藤良子 (編). 京大心理臨床シリーズ3 遊戯療法と子どもの今. 創元社.
- 柳沢和彦・岡崎甚幸・高橋ありす (2001). 風景構成法の「枠」に対する「川」の類型化およびそれに基づく空間構成の一考察—幼稚園児から大学生までの作品を通して. 日本建築学会計画系論文集, **546**, 297-304.
- Wallon, P. (2001). *Le dessin d'enfant*. Paris: Presses Universitaires de France. (ワロン, P. 加藤義信・井川真由美 (訳) (2002). 子どもの絵の心理学入門. 白水社.)
- Winnicott, D.W. (1971). *Therapeutic Consultations in Child Psychiatry*. London: The Hogarth Press Ltd. (ウィニコット, D. W. 橋本雅雄 (監訳) (1987). 子どもの治療相談①. 岩崎学術出版社.)
- Winnicott, D.W. (1971). *Playing and Reality*. London: Tavistock Publications. (ウィニコット, D. W. 橋本雅雄・大矢泰士 (訳) (2015). 改訳 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社.)
- (心理臨床学講座 博士後期課程2回生)
- (受稿 2018 年 8 月 31 日, 改稿 2018 年 11 月 23 日, 受理 2018 年 12 月 21 日)

臨床心理学における子どもの描画に関して

—相互交流としてのスキュグルを中心に—

大場 有希子

本論では、認知発達の側面から述べられることが多い子どもの描画について、心理臨床的な視点からその意義や描画の中で生じていることについて文献を用いて検討した。なぐりがきから象徴性を持った絵となり、形が生じて画面が秩序化されていく描画の発達的变化は、言語や社会性、様々な心理発達と複雑に絡み合っている。言語能力が未熟である子どもにとって描画はコミュニケーションとなり、臨床場面において描画はセラピストとクライアントの中間領域での遊びと考えられる。とりわけ相互性の高いスキュグルは間主観的なものであり、言葉になり得ないものを表現するとともに言葉での表現を促し得ると示唆されている。スキュグルをはじめとする子どもの描画は内界を表現し他者に伝えるとともに、描画行為そのものが相互的な交流の場にもなり、描画からその交流の質や他者・外的世界との関わり方についても検討することができる可能性が考えられた。

A Study of Children's Drawings in Clinical Psychology: Focusing on the Squiggle Game as Mutual Communication

OBA Yukiko

The drawings of children are often discussed from the viewpoint of cognitive development, but this paper discusses the significance of children's drawing and the underlying mechanisms from a clinical psychological viewpoint based on previous studies. As children grow, symbolic drawing emerges from scribbles. Shapes then emerge, and things are drawn in an orderly manner. These developmental changes are related to various forms of psychological development. Children do not have substantial verbal skills, so the drawings become their means of communication, and in psychotherapy drawing is considered to be "playing" in the intermediate area. The squiggle game is mutual communication and has intersubjectivity. Children express what cannot be said through words in squiggle game. At the same time, squiggle game promotes their linguistic expression. In addition, children's drawing, including squiggle game, is considered to not only express the inner world to themselves and others, but is also a medium of mutual exchange between client and therapist. Therefore, it is possible to consider how children engage with others and the external world from their drawing.

キーワード：子どもの描画，スキュグル，相互交流

Keywords: Children's drawings, Squiggle game, Mutual communication